



俳

門 句

直 人

禁猟区鳥にもわれにも別天地

白梅に身をもたへつつ遠い城

梅林姥の杖に日は照らす

内職となさぬものとの日の長さ

裸誌手に熱きものの目に光る

本名 門 直治 富山県出身 六十七才

その大きな顔に、いつも、ひげが生い繁つていて山男のような豪
快な風貌の中に、眼はなんとも優しく澄んでいる。

三十三年、安定所に登録して以来、力がありそうなのに、喧嘩口
論を見たことはない。元気がないのでなく、そんな子供のような
ことからは超然として、人生を考え、悩み、深い思考をめぐらせて
いるかに見える。

二十才頃から俳句に興味を持ち、約四十年にして初めて処女作を
出す。

静かな酒を好む。それが近年、量をすぎし過ぎるかと思えたが、
遂に体を損ねて入院し、退院したかと思えばまた入院といった調子
であった。

二月初め、思い切つて老人ホームに入った。現在の心境は彼が
人生の旅路終えきてわらし脱ぐ

と詩っている通りだろう。会長への私信には

「四月あたりからは近辺を歩きながら詩が書けそうな気がします」
由を書いて来ている。

詩心が君の孤独を救つてくれますように――

(広野記)



俳

句

和田 寿澄

ある期待秘めて密柑を掌で弄ばす

仄かなる希い密柑に湧く生理

そのことに触れず密柑剥く丁寧に

拒否されて密柑の酸味に自己嫌悪

感情を耐らえて含む密柑酸し

晩秋の葺しめく街にいる孤独

本名 和田 進 五十五歳 和歌山県出身 無垢
和歌山商業学校中退後、南海木材会社、鴻池組等で社員として勤
める。昭和二十年一月大東亜戦争で応召し、呉海軍航空隊の整備員
として軍務に服していた間に、アメリカ空軍による空襲で、母と妻
と家を失う。

終戦後、義父の砂糖ブローカーの手伝いをしていたが、友人に大
穴をあけられたことから来阪、西成労働出張所に登録して日雇とな
る。そのかわら簡易宿泊所の管理人をしてきたが、現在体を損ね
自宅で療養中である。

戦争で肉身を全部失い、身寄りのない一人暮らしを続けている。
この人も戦争による犠牲者の一人なのである。句作することによっ
て、そこに生き甲斐を見出そうと努めるこの人の態度こそ、大いに
学ぶべきものがあると思う。

裸の会には、二年前に入会した会員である。

(松原記)



ど
根
性

角
田
菊
治

私は釜ヶ崎にやってきて十五年になります
アンコをしたこともあります

なんとかして生き抜かなければならないと

三人の子供を抱え

八百円の元手で屋台店を始め

どうか三人の子供を一人前に育てました

男はへなへなしては駄目だ

ど根性をもたなくてはならないと思います

ど根性さえあれば

みんな立上ることが出来るんだがね

せめて裸の会員たちだけでも

ど根性を見せて欲しいものだと思います

本名 角田菊治 五十四才 山口県出身 露店商

労働福祉センターに近い南海線のガード下で毎朝五時ごろから天ぶらを売っている
このおやしさんを一言で表現しようと思えば「ど根性」以外にはないと思う。

経歴を並べれば非常に長くなるが高等小学校を高等一年でやめた彼は十七才で来阪し、
沖仲仕をやったのがはじまりで京都のコンニャク屋の店員、二十一才で現役入隊、
二十三才で除隊後また大阪で労務者、日立造船に勤務したがまた支那事変で召集され、
いまも体の中に手榴弾、岩石等の破片が残る戦傷を負った。昭和十四年に除隊、
日立に復職し、現在天ぶらの屋台でリスのように小まめに働いている奥さんと一緒に
なつたが終戦で日立造船を解雇され、一時故郷に帰り商売をやったり奥さんの家がある
高知でも魚屋をやった。

釜ヶ崎に出てきたのは昭和二十五年、安定所に登録、その十二月にベニヤ板の会社に
就職したものの人に使われるのが嫌になって、八百円の金を資本（内訳は材料の鯨
肉四百円、のれん百円、調味料、野菜二百円、残りの百円が運賃、三人の子供の食
費、夫婦はラムネ一本づつ飲んだ）にして、いま天ぶら屋をやっている附近で屋台を
出した。

それが裸の会創立当初の舞台の一つであるやなぎやの前身であるが、三十八年に立
ちのきでなくなったのは悲しい記録だ。

ど根性の持ち主である彼は昨年の秋から今の商売をはじめた、この素晴らしいフア
イトが三人の子供を釜ヶ崎で成人させ、娘を幸せな結婚生活に送りこんだのだ、八百
円の金の貴重さと、やればやるということを示唆する大きな例として彼の逞ましい生
活態度に期待したい、勿論一番最初からの会員である。

(田結記)



原 始 の 人 間 像

田 尻 宗 男

紙屑の散らばる

カスバの空 人間模様の

無数の星の眩き 神は

日毎 ポケットからすり抜けて……

——お前は墓穴を掘る

時の鎖に解かれずままに

不明の足踏みにおびえながら

夜も晝もクさようなら……か

見えない自分の假像よ

季節のない肌の臭気よ

公園に降りて餌を漁る鳩

魂と肉体の離れた傾斜の街よ

(日本の)血の焚火の燃烈さを知っているのは
がたびしの骨だけだ この原始の片隅に!!

本名 田尻宗雄 五十八才 奈良県出身 某新聞社勤務

西成安定所に登録して日雇をしていたことがある。

詩歴四十年の持主で「日本詩人クラブ」会員。大正の末期に詩誌「表現」を発行したことがある。若い頃から英・仏文学に没頭し「銀杏亭」のペンネームで、エッセイ、随筆等を多く書いている。

「銀杏亭」のペンネームで、日払いのアパルトマンである彼は「自分の部屋は、書物や新聞、雑誌等に占領され、寝るスペースもない位窮屈な場所であり、塵埃の中で、生活と生存の中間に、ポータラインの見極めもつかない」と悲しい告白をもらしています。

彼を見ていると「詩人とはなんて悲しい存在なのだろう」と考えさせられます。釜ヶ崎で眠っているのは惜しい人間である。

裸誌には時々しか寄稿しないが、あなたが燃やし続ける詩的情熱を、裸誌の上で、大いに燃やしてもらいたいと思います。

(松原記)



カタストロフへの序章

結城陽児

歪んだ過去に繋がる 血の色をしたタンブラーを手で囲み 生命をシリシリ燃
やし尽くす沈黙を続けた港町による

ハリ・ジェイムスのペットが悲しく慄えながら紫のひだに消える 小さな部

屋の木の鳩はいま十声鳴いた

「ジュウゼーム・ツータラウイー・メ……」

君は狂つたように言葉を切り 運命のカードを並べ始めたのだ

アマチュアばかりの裸同人の中ではベテラン中のベテラン。芸術家を以て任じ、奇行多し。底なしに飲むかと思えば、ときに、禁酒を宣言する。飲酒の揚句、忘我の極致に達することもないではないが、その中にも、えもいえず微笑ましきのある好漢。

某社の編集長として禄を食む。

本名——田結 幸雄

(広野記)



南京虫

上谷 五月

十一月というのに私の家には
南京虫が出没する

一種異様な権威をもって

真っ白なシーツの上をはい廻る

深夜ふと目覚めて拡大鏡で見ると

まったく壮観だ

ひよっとすると南京虫は

南洋で産まれるヤシガニや

海亀の一種ではなかるうか

やっこさんが

人間に挑戦して来る時

急激に身を避けると

手足をばたつかせて

容易に立ちなおれない

私の性格にも関連性がありそうな

ヤツはノ

釜ヶ崎の虫だ

晩秋の深きに 南京虫が泣く

本名 上谷五月(かみたにいつき) 五十才 広島県出身
高等小学校卒業後、工具、セールスマン、活弁、艶歌師と続く彼の職歴を並べていたら大変なことになりそうだが、戦時中は軍属としてソロモン群島に、そこで身につけた技術を生かして、復員後の昭和二十五年に釜ヶ崎に出て府警パト隊の靴修理、その後は今宮高工で靴屋をやっていたが、雨と長い休暇には困るので失対に登録した。そのカード番号が私と一番近いので、毎日同じ現場で仕事をした。
この小型戦車のような男は、とにかくよく働らきよく飲んだ。その酒が、ときには彼を迷路のような状態に引きずりこみ、今工の看視員、常雇いの会社などにも永動できなかった大きな悲劇の要因をつくったのだが、現在は酒量も減らし、安定所裏に開いた古物の露店で頑張っているのは嬉しい。
彼も「裸」ではじめて詩を書いた一人だ。泣き虫からまた本名に戻った彼の、特長のある表現法をもつ作品に期待しよう。
(田結記)



無 精

芥 洋 之 介

穢いよりは綺麗な方がよろしい。
醜いよりは美しい方がよろしい。

怠惰であるよりは、勤勉である方がよろしい。

それは一一、もつともなこと、よく弁えている。弁えてはいるのだけれど、弁えているだけで、ちつとも、そうしようと努力しないから、弁えていないに等しい。

大晦日に、新居に移つてから初めての掃除をした。四カ月振りだ。整頓された部屋を見渡して、確かに気分は悪くなかつた。

ところが、なにしろ狭い部屋のこと、いつの間にやらもとの乱雑に戻つてしまつた。

栓抜きとか、缶切りとか、そういった小さいものを紛失したが最後

ちよつとやそつとでは探し出せない。

この間、めし杓子がどこかへ散歩に出かけてしまつた。新しいのを買つて来たら、三日ほど経つて、なんと、木炭と同居していた。いま、眼鏡が紛失中で、もう少し待つてみて、出てこなかつたら、一つ買わねばなるまい、と思つてゐる。

本名 広野良雄 五十二才 大阪市出身

釜ヶ崎でのつきあひも十年近くになるが、妙にウマがあうのは、二人とも文学が好きで酒が大好きだからだろうか？一時こつていたギャンブルを捨てて、裸のブレーンの一員として頑張つてゐるのはたのもしきりだ。

過去に新聞コントは無数に書いてゐるが他に連載ものを二回発表しているベテラン。今は四条の一室で自炊らしきことをやりながら酒瓶を並べ、新しい大作に取り組んでゐる。

安定所に登録してゐるが、いやな仕事は休むというあたり、やはり、センバのボンである (田結記)



短

歌

森田敏雄

造花を買い来てかざるわが部屋に明るさまして心なごやむ

四十すぎひとり暮しのわが部屋にヌードの絵を貼る若き心で

唯生きてすごして来たる過去なれば悔なき今年になさむと想う

消灯し眠りにおちゆくときよりは貧苦も忘れし一個の物体

強く強く季節風吹くこの朝にゴミ車引くわがさだめは哀れ

風に飛ぶ紙屑ひろうわが姿風におどれるピエロにて悲し

灰の舞うゴミ運搬車にゴミを積む仕事つづけし労苦の一年

本名 森田敏雄 四十二才 富山県出身
裸誌の第二号から短歌を書き続けている真面目な
会員。

戦時中はタイ、仏印を転戦した。そのとき部隊の雑
誌に短歌を書くつもりであったが雑誌は発行されるに
至らなかつた。二十一年の六月に復員してから短歌を
ノートに書き綴り富山新聞や北陸夕刊に投稿、新潟短
歌にも発表した。

石川啄木にひかれて歌をつくるようになったという
が、生活を詠うその作品は裸歌壇に輝やきつづけるで
ある。西成安定所の日雇六年生である (田結記)



俳

句

有本孫之介

寒梅や傷つかぬ日は酒屋へゆく

死者に逢う二月の塩がきらきらして

二ツ月のマツチ消えゆく人臭し

本名 有本孫之助 四十九才 大阪市出身
昭和三十年西成俳句会の前身「土」に入会、以来日雇をしなが
らこの道に精進して十年になる。

昭和三十九年に俳句作家新人賞を受賞

この人も孤独性が強いだけに、俳句一筋に生きる人である。大
阪を愛し、釜ヶ崎を愛し、その中で俳句を作ることのみに生き甲
斐を感じているだけに、この人の俳句には、どこことなく人間性へ
の郷愁というか、哀感を感じさせるものがある。
西成安定所に登録した日雇十年選手である。

(松原記)



短

歌

比呂

波

狭き門とうりもやらず命まつ懈怠のおもり足にしがらむ

丘の峠を仕事帰りのバスは行く木立のいろに旅するおもい

菜の花も紫雲英も見えず青もなし車のあふるる河内野の道

本名 広波清一 大阪市出身 六十才

旧制中学中退後、店員、衣料品店経営、学校の小使さん等をやつて人生経験が非常に豊富。釜ヶ崎も安定所も丁度十年選手になる。

若いときから読書が好きで、そのためか強度の近眼であるのは気の毒だ。然し趣味は広く、謡曲からクラシック。文学も和漢洋に明るいのだが、本人は少しもひけらかさない。何ごとでもとことんまで追求する性格からであらう。

彼も酒を愛する者のひとりだが、この点だけは決して深酒をしない。ほろ酔いで謡いを小さくうなりながら歩く姿を釜ヶ崎でよくみかけるが、これが彼の一番楽しい時間なのだ。

作品は少いが、これにも正義派で真面目な性格が滲みでているようだ。

(田結記)



俳

句

登

志

美

棒先で蛇からかえり五十路の顔

緑蔭がほしい干し鱈の大きな口

突つ佇ちてすでに晩夏の石を視る

遅日を確かむ山の発破音

海なき街海笑う遙かにて

本名 松下登志美 五十三才 大阪市出身

失対十年選手ではあるが、自分の登録番号に近い人だけしかその存在を知らないような、実におとなしい目立たぬ人。酒を飲むでもなく、博打はおろか、たしか煙草も吸わなかつたと思う。この人の生き甲斐は俳句一つにある——のではなからうか。

いい学校を出ているが、俳句歴は更に古く小学校六年から。本格的に俳句に専念したのは二十七年頃から当時句連坊と号した。ホトトギス派の貝原秋峰に師事したこともある。彼の処女作は

故郷の方へ行くなり秋の雲

幸い、裸の会には俳句のペテランがワンサとおられる。みんな仲よくつきあつて、後進にはよき指導をお願いしたい。

(広野記)



俳句

和田春土

いさかふ夫婦夜寒の歩道ネオンの赤

受けし日銭ぬくもる間もなく酒屋へゆく

銭がない着ているシャツを売る

新聞で巻いた大根が落ちている

小公園枯れぶらんこに大人が乗る

賭博の座さけて孤りに雁渡る

本名 和田春土 六十五才 神戸市出身
神戸の川崎造船所の工員として長期間勤務した彼も、やはりあの戦争の大きな被害をこうむつた一人である。
彼は昭和二十九年に句誌(白い鳩)を創刊したが、これは現在の西成俳句会の前身であり、いわば釜ヶ崎俳句の先駆者である。西成労働出張所のカードを貰ってからすでに十年になるが、その間も俳句ひとすじを貫き通してきたおとなしい人。
白い鳩は改題して土となり、いまは会員数二十名の西成俳句会と発展して毎月一回句会を開き、関西俳壇に特異な存在を示しているが、彼はその会誌の編集者として地味な努力を続け、裸誌上にも毎号キヤリアの豊富さが感じられる作品を発表している。
小学校卒業、日雇労働者

(田結記)



狂歌

鈴木幽峰

われひとり生きるのさえも苦しきに他人の事などかまう暇なし

ひねくれた世捨て人でも人並にまだ忘れまじ恩と義理とは

頬つたう涙でわれにかえりなばあたりに笑う人なきかと見る

仕事着に着替えて見れど寒きゆえまたもぐり込む寢床の中かな

世の中の不幸を一人で背負い立つ恵まれぬ身のわれぞ悲しも

休憩にどかんの上であぐらかき歌のペンとる鈴木幽峰

本名 鈴木千賀男 四十九歳 大阪市出身 失対日雇
幼いころから、あまり恵まれた境遇ではなかったらしい。自分でも不運をかこち、彼は
その慰めを歌の道に求めた。幽峰の筆名は俳師「朱穂」からもらったもの。
大へんな多作家で、ほとんど原稿を持ってくる。彼の希望通りにすれば、すでに編集部
に預かっている原稿だけで昭和五十年の分まである。
「たくさん出してくれるのは結構だけれども、私としては百の駄作より一つの佳作を望む
のだけだね」
ときどきいうけれども

「私は頭がそんなによくないから、いいものは無理ですよ」
とけんそんなばかりで、彼のこの傾向は変らない。

日雇は十五年になる。初め東住吉区の親戚の家から通っていたが、釜ヶ崎に住みついて
からは十二年。

炭鉱に働いたこともあるし、いろんな職業に従事したが、前職は漫才師。彼の生涯の願
望は、早く前職に戻り、その道で一生を貫くことであることは、たびたび打ちあけられて
いる。とすれば、なににも増してその方の勉強ととり組み一日も早く復帰するよう努力し
なければ、これはおたがいさまのことだが、失対ボケになってしまふだろう。

おたがいに、目的に向って頑張ろうね。

(広野記)



葬送の記憶

平井克侑

一発の原爆に

見るも無惨な死体となった
これが自分の妻と子の姿か
あたり一面は焼け野が原
ただそれを見つめるだけで
なすすべも知らなかった

焼けただれた死体を見つめて
茫然と立ちつくした まる三日
いつまで見ていよというのか
仕方なく火葬にすることにした

焼け残りの柱や

建具をつみかさね

火をつける

とめどなく涙がでるのです

ああー

あれから二十年

絶叫は消えても

葬送の日の記憶は

年年歳歳深まっています

本名 平井正一（ペンネームは平井よしゆき） 五十二歳
大阪市出身 日雇労働者
東京で自動車の運転をしたり、日立造船で鍛冶工をしたり、仕事
はなんでも出来る人だから、長崎造船では世話人もやった。
終戦後も長崎県下の鉱業所に世話人として働き、二十九年四月大
阪に戻って安定所に登録。

裸の会に入るまでは随分バクチもしたらしい。そんな関係から
か、長崎を引上げる時には身一つだったというが、さきに毎日新
聞に紹介されたように、夜逃げしてきたわけではなく、夜逃げ同様
の状態であったと話したのが大げさに取り上げられたということだ
あるから、本人のためちょっと触れておく。

現在はもろんバクチはやらない。

会の活動には積極的に動いてくれるほか、自身の勉強も詩、短歌
俳句、文章、どの部門にも精を出し、書道の先生につくなど、この
人の努力にはただただ頭が下がるばかりだ。

酒は現在飲まない。コーヒーが大好き。

こんごも変ることなく、会のために尽してもらいたいし、自分の
勉強を続けてほしいものである。

（広野記）



猫と私

中井良子

私の仕事は日雇稼業
今日も道路そうじだ

昼前のひと休みのとき ちよっと一服

たばこに火をつけようとしたら

私の前に一人の男が立ち

たばこを一本くれ

といった

一本しかないからやれないよ

といったら 横にいた仲間が

吸いさしのたばこを男にやった

男は私の方へ向きなおり

わしは兵隊帰りや

軍曹だ

たばこくれなかった代りに気合い入れたる

というので

なんの気合いや

仕事のじゃまになる

といって突き飛ばしたら

顔見知りの手配師が来て

何をするんや このおぼはんのじゃましたらいかん

といって猫を掴むように

男の襟首を掴んで引張って行ってくれた

兵隊帰りの軍曹も

猫そっくりやなあ

といって皆は大笑いした

本名 中井良子 41歳 大阪市出身 日雇労働者

三歳の頃から釜ヶ崎に居住、十八歳の時現在の夫と結婚したが、やはり釜ヶ崎で世帯をもち、八年前から西成労働出張所の失対労働者として登録し、日雇稼業に従事して今日に至る。

二十歳の長男を頭に、二男一女という恵まれた家庭をもっている。長男と二男は裸の会の音楽部員として、ギターの練習に余念がなく、将来を期待されている。

古くからの会員であるが、裸誌に詩を書いたのはこれが二度目、最初に書いたのは「一日紳士」という詩である。

この人も釜ヶ崎に住み、己が住む街を愛し、裸の会を、こころの寄り処としている会員のひとりである。

(松原記)